

## 資料

## 国際化対応海外特別発表報告

平成9年度国際化対応予算による出張報告  
太田喜久子、土屋香代子

参加大会：第21回国際看護婦協会 (International Council of Nurses ICN) 4年毎大会

開催地：バンクーバー (カナダ)

参加日：1997年6月16日から6月20日

## 大会の紹介：

ICNは、会員国112、約150万人の世界の看護婦を代表する組織である。1899年イギリスで設立し、ヘルスケア領域の中では世界でもっとも古い専門職団体である。日本看護協会員は、日本看護協会がICNの会員協会になっているため、自動的にICN会員となる。

ICNは、4年の1度ICN大会を開催し、会員は誰でも参加することができる。今大会は、約118国、6,000人の看護職、うち日本からは200人以上が参加した。

“Sharing The Health Challenge (健康をみんなの課題に)”をメインテーマとし、基調講演と2つの全体会、10の主要会議、18の分科会、40のシンポジウム、15の特定関心領域グループ会議、122題からなるポスターセッション、423題の研究発表が行われた。看護実践家や看護研究者によるシンポジウム、演題発表、ポスターセッションは実践の向上を目指しかつ学術的にレベルの高いものが多く見られた。全体に、先進諸国は、医療費の削減をめざすさまざまな医療改革の影響を受け、また開発途上国は深刻な看護職不足に悩んでいるという背景の中で、人々の健康の重要性への認識をますます高めるために、看護職が政治的、経済的な問題に屈せず、様々なチャレンジをしていこう、ということに討議が焦点化され、看護職はもっと影響力をもたなくてはならないという主張がいくつものセッションで聞かれた。参加者は、同じような関心をもつ看護職と出会い、看護のあらゆる局面での最新の情報と動向をつかみ、新たなネットワークを広げ、今後の方略への手がかりを得ることができたと思われる。

また、ICNは2年毎に、会員協会代表者会議(The ICN Council of National Representatives CNR)を開催している。今回大会と同時に開催された会議では、世界の共通言語を目指す看護実践国際分類を推進することや、

看護職のアドボカシー役割、継続教育を促進すること、看護職の仕事評価についての国際的意味など、多くの事項が討議され決議された。一方1国1会員協会という原則による会員国の承認に関して紛糾する場面もみられ、国内事情の異なる国際組織の運営の困難さを感じた。

ICNは、1999年イギリス ロンドンで100年祭を催し、21世紀に向けての看護、ヘルスケア、ICNのための明確な将来構想を提示することになっている。第22回大会は、2001年デンマーク コペンハーゲンで開催される予定である。

なお、ICNでは1977年の東京大会から学生大会も行われている。今回は、6月15日に10数カ国約500人、うち日本からは約40人の看護学生が参加していた。各国の状況について情報交換をし活発な討議が行われて、今後は国際学生大会としての組織を作ることも話し合われたようである。日本の学生たちの間では、まず国内の看護学生組織を作ろうという声が高まったということであった。

## Cultural Attitudes and Health Care: The Japanese Experience

Lyn Doole

参加学会：SIETAR (Society for International Education, Training and Research) XXIII Congress

発表演題：Cultural Attitudes and Health Care: The Japanese Experience

開催地：Curacao, Netherlands Antilles

開催日：June 2nd - 7th, 1997

発表者氏名：Lyn Doole

## SUMMARY:

The session began with some general observations about health care and a brief overview of the four dominant world influences in modern medical practice. A series of thirty health care situations, each with a multiple choice response battery, was then presented. Participants were asked to choose the response most natural to them from their own cultural background. The cultural underpinning to each choice was then explained, with particular emphasis on a typical Japanese answer and the reason for it.

At the same conference I was a "foreign expert" panelist in a round table on health care problems in Curacao. Other panelists included from Curacao, the Minister of Health, the Director of Mental Health Services, the Dean of the Faculty of Medicine, and an M.Sc. candidate in Nursing; from the Netherlands, a systems analyst, and a professional health educator from California.

Whilst in the Netherland Antilles, I had the good fortune to meet with the Director of the College of Nursing and discuss the programme of instruction run there. I was also able to visit many of the public Health Centres run by the White-Gold Cross Society, and talk with the nurses in charge of these centres.

第18回国際脳循環代謝学会報告  
長澤治夫

第18回国際脳循環代謝学会が1997年6月15日～19日にアメリカ合衆国ボルチモアで開催された。本学会は2年に1回開催される国際学会で、神経科学の分野では基礎・臨床医学に関係する研究テーマが多いのが特徴である。また、本学会の歴史的からみても、脳血管障害（脳虚血性変化、脳梗塞、脳出血など）に関する基礎的・臨床的研究が多いのも特徴的である。研究論文数は総計794編で、全てポスターによる発表であった。

我々は以下の2題の研究論文を発表した。

(1) Nagasawa H, Tanji H, Higuchi M, Itoh M, Silva WW, Takahashi Y, Itoyama Y: Brain localization of semantic processing of Japanese ideogram (kanji) and phonogram (kana) in English and Japanese: An activation study with 3-D brain mapping using PET and SPM analysis, *J. Cereb. Blood Flow & Metabol.* 17: S269, 1997

(2) Ishizaki H, Itoh M, Nagasawa H, Silva WW, Tanji H, Higuchi M, Okamura N, Tashiro M, Ido T: Regional activations during processing of Japanese ideograms, kanji, and phonograms, kana in English speaking bilinguals: A  $H_2^{15}O$  rCBF study, *J. Cereb. Blood Flow & Metabol.* 17: S266, 1997

研究内容の詳細については、Abstract集を参照して頂きたい。

国際学会参加報告  
中嶋康裕

参加学会：第25回国際動物行動学会 (25th International Ethology Congress)

発表演題：A protogynous wrasse may have a functionally simultaneous hermaphrodite phase

開催地：ウィーン（オーストリア）

開催日：1997年8月20-27日

発表者氏名：中嶋康裕

<国際動物行動学会の紹介>

国際動物行動学会 (International Ethology Congress) は、Lorenz K, Tinbergen Nらによって1950年代に創設された学会である。当初はclosed systemで運営されていたが、参加希望者の増加や参加者の国籍の多様化などによってオープン化の要請が強まり、最近ではopen systemに変更されている。学会の開催は2年に1度で、学会発祥の地であるヨーロッパとそれ以外の地域とで交互に開かれている。アジア地域では初めてのことで、1991年に日本でも京都で第22回大会が開催され、私も学術プログラム委員を務めた。

動物行動学の発展にともなって、神経行動学 (Neuro Ethology)、行動生態学 (Behavioral Ecology)、人間行動学 (Human Ethology) などの分科がそれぞれに国際学会を開くようになった現在でも、本学会はこの分野に関連したあらゆるトピックを幅広く扱い、さまざまな視点から意見を交換できる場としてきわめて重要な役割を担っている。ヨーロッパを中心に発展したこの学会の性格として、哺乳類、鳥類、淡水魚類を扱った研究発表が比較的多いものに対して、日本からの参加者は昆虫や海水魚類を対象としている研究者が多いのが特徴となっている。次回は1999年8月にインドで開催される。

<これまでの研究の概要と今回の講演内容>

これまで私は、甲殻類や魚類の性転換現象を中心に

研究してきた。特に、桑村哲生（中京大）および余吾豊（九大）と共同して行った、ショウガサングにすむダルマハゼの性転換現象の研究では、このハゼが雄から雌にも、雌から雄にも双方向に性を変えることを発見した。そして、既に発表されている報告を検討して、双方向性転換が進化する場合は3つの条件、すなわち、マイナス成長が起こること、雌雄の繁殖成功の優劣が体サイズによって二度逆転すること、社会的地位の変動が起こること（ダルマハゼの例）にまとめられることを考察した。また、ダルマハゼに近縁のサングハゼ属の4種も双方向性転換を行うことや、フトウネタケにすむウミタケハゼが雌性先熟性転換を行うことも確認した。

こうした研究の過程で、性転換が起こる移行的な段階として、一時的に雌雄両性の機能を持つ同時的雌雄同体の時期を経る生物がいるのではないかという疑問が生じた。同時的雌雄同体の期間はごく短いと予想されることから、繁殖行動が観察しやすいベラ類を対象として、なわばり雄を除去した上で、優位雌の繁殖行動をSCUBA潜水によって直接観察して、確認することとした（桑村哲生他4名との共同研究）。すると、1996年夏のカザリキュウセンを対象とした調査中に、なわばり雄の除去直後に優位雌が劣位の雌に求愛して、さらに産卵にまで至ることが観察された。性転換中の個体が劣位の同性個体に対して求愛行動を行うことはこれまでも報告されていたが、実際に産卵にまで至る例は自然条件下では知られていなかったもので、これはカザリキュウセンが同時的雌雄同体期を持つことを示しているのではないかと考えて、今回の講演を行った。本講演のabstractは、Advances in Ethology (1997) vol.32 p.214に掲載されている。

#### The Impact of Nursing Knowledge on Health Care

Informatics

—— NI'97 参加報告 ——

山内一史

参加学会：The 6th International Congress on Nursing Informatics

開催地：Stockholm, Sweden

開催日：September 26 - October 1, 1997

#### <IMIA看護分野ワーキングカンファレンスの紹介>

そもそも、医療情報学の分野における看護情報学の国際会議は、1980年東京で開催された第3回医療情報科学国際会議（MEDINFO 80）における、Informatics in Nursing というワークショップに端を発しています。この時の座長は、Introduction to Nursing Informatics<sup>1)</sup> という看護情報学の定評のある教科書の著者でもある Hannah KJ 先生でした。

このワークショップをきっかけとして、国内では日本医療情報学会（JAMI: <http://www.osaka-med.ac.jp/jamiM.html>）に看護情報システム研究会が発足し、日本における看護情報学の研究が本格的に始まりました。このあたりの詳しい内部事情については、林滋子先生が「看護に生かす情報システム」<sup>2)</sup> という本で詳しく述べられています。

その後国際的的には、1982年に国際医療情報学連盟（IMIA: <http://www.imia.org/>）の看護分野のワーキングカンファレンスとして英国で第1回目の会議が持たれ、このカンファレンスはその後3年ごとに開催されるようになり現在に至っています。

今回私が参加したスウェーデンのストックホルム国際会議場で行われた大会は、その第6回目に当たります。この大会では、来るべき21世紀に向けて看護がどのような情報戦略を取って行くかということを中心に「The Impact of Nursing Knowledge on Health Care Informatics」というテーマのもとに、世界の23カ国から204演題が集まり、各セッションにおいて活発な討議が行われました。

なお、次回はちょうどきりのよい西暦2000年の4月28日から5月3日にニュージーランドのオウ克蘭ド市で開催される予定になっています。

#### <発表要旨>

近年、インターネットを介して世界中の多くの看護情報資源が利用可能になってきたことに伴い、看護職の者にも、これらを自由に活用できる能力が問われる時代となってきています。

今回私が発表したのは Internet and Videoconferencing というポスターセッションでした。演題は「A Small Intranet for Teaching how to Use the Internet」というものです。内容は、インターネットに代表される広域ネッ

トワークに使用されているテクノロジーをローカルなネットワークに転用した、いわゆるイントラネットというシステムを某看護学校の情報処理室内に構築し、このイントラネットワーク中で電子メールやWWWなどの利用法を看護学生に学習させた事例報告です。発表後、私の発表したセッションの座長であり、National League of Nursing monograph, Guidelines for Computer Education in Nursing の共同執筆者でもある Diane Skiba 先生から、このような教育システムはインターネットを自由に利用することのできない多くの国々の看護情報教育環境において、今後必要となる手法であるというコメントをいただくことができました。

#### <その他>

今回の大会には、私も含めて日本から33名の方々が参加されました。私が発表した同じセッションでは、神戸市看護大学の真嶋由貴恵先生もインターネットを活用した教育用 CGI システム (<http://www.kobe-sc.tao.or.jp/kccn/new/>) について発表されており、発表演題3題中2題までもが日本からのものでした。また、全ての発表演題中インターネットに関連する演題は15題ありましたが、その内4題は日本からの発表であり、多くの困難を抱えているにもかかわらず、この分野で日本の研究者が世界に伍して頑張っていることが数字として示され、心強く感じられました。しかしながら、用語の統一や独自の看護診断システムを構築するといった、看護情報学の基盤を構築する基礎的分野では、まだまだ日本は諸外国に大きく水を開けられており、早急に全国規模の対策が必要であることを痛感させられました。残念ながら、NI'97の発表演題それぞれを具体的にここで紹介することはできませんが、各演題の詳しい発表内容は「Nursing Informatics -The Impact of Nursing Knowledge on Health Care Informatics-」<sup>3)</sup>としてIOS Pressから出版されています。興味のある方はそちらをご参照下さい。

なお、学問的な話を離れて余談になりますが、今回のワーキングカンファレンスでの呼び物の一つは、ノーベル賞の晩餐会が開かれるストックホルム市庁舎におけるWelcome Receptionでした。海に面した中庭からの景色は大変印象に残るもので、ノーベル賞受賞者の気分を少しでも味わうことができました。しかしなが

ら、出された料理は質素なもので、味も私の舌に合うものでありませんでした。

最後に、今回宮城大学から国際化対応予算をいただき、上記のような貴重な体験をさせていただきましたことを心から感謝いたします。

#### <参考文献>

- 1) Hannah KJ et al.: Introduction to Nursing Informatics, Springer-Verlag, 1994
- 2) 林滋子: 看護情報システム研究会発足までの歩み、看護にいかず情報システム、日本医療情報学会看護情報システム研究会編、日本看護協会出版会、9-22、1997
- 3) Nursing Informatics -The Impact of Nursing Knowledge on Health Care Inform-, ed. Gerdin U et al, IOS Press, 1997

国際化対応教員海外特別旅費予算による出張報告記  
山本真千子

参加学会: XIXth European Society of Cardiology  
発表演題 (2題):

1. Assessment of the spontaneous baroreflex method comparison with the phenylephrine method
2. Moduration of baroreflex sensitivity during head-up tilt studied by a spontaneous baroreflex sensitivity method

開催地: スtockホルム (スウェーデン)

出張年月: 1997年8月

発表者氏名: Yamamoto M, Sato H, Iinuma H, Aizawa T, Kato K

本学会 (ESC) は循環器病学の分野ではアメリカにおける American Heart Association (AHA) に相当する全ヨーロッパの循環器病学の基礎から臨床にいたる研究分野の大会である。毎年ヨーロッパの都市で開催され、世界中からおおよそ8000題の演題が集まり、このうち約2000題が選ばれ発表の場を与えられる。従って、採択率は25%ということで、AHAにおけるそれに近い採択率であるが、ご多分にもれず北米・ヨーロッパに比べると、日本にとってのハードルはこれより遥かに高い。従って、前職の研究所などではこの学会やAHA

に採択されるとスタッフから "Congratulation!"と言われ、この状況はアメリカの Labo.でも同じと聞いている。また、全般的に北米とヨーロッパの研究内容の比較では、やはり北米では多額の研究資金を必要とする先端基礎医学がより認められやすく、一方、ヨーロッパは比較的研究資金が少なくてすむ地味な仕事(勿論、内容は輝くものも沢山見られる)が多く見受けられると言う点では、まさに、この分野でも欧州型・北米型研究の景色は変わらない。そんな中で、自律神経のバランスを非観血的に見ようとする試みは古くからあったが、コンピューターを利用してスペクトル解析を行うようになってからは格段の進歩を遂げ、数年前まではイタリア、ミラノ大学を中心にヨーロッパでは Heart Rate Variability を使った自律神経評価全盛期であった。我々もこの時期に運よくこの Big Wave に乗り、多くの仕事をする事ができた。また、その延長線上にある今回発表した "baroreflex sensitivity 圧受容体反射感受性の非観血的測定法の信頼性と Head-up Tilt 中の変化" は今まさに ESC のメインテーマのひとつであることは自負してやまない。今後は宮城大学看護学部において、このような非観血的手法を用い、看護技術の科学的研究に繋げてゆければ幸いである。

象者の QOL」についてであった。

私は、日本において発表されている(脳)神経学に関する看護研究の動向について発表した。

#### 国際化対応予算での出張報告

結城美智子

参加学会：World Federation of Neuroscience Nurses VII th. Quadrennial Congress. Meeting in conjunction with the World Federation of Neurosurgical Societies.

開催地：アムステルダム市・Vrije 大学

開催日：1997年7月8日-7月11日

学会の紹介：

4年に一度、国際神経外科学会が開催され、そのひとつに看護職による国際会議が開催される。第7回目にあたる今年はオランダのアムステルダムでおこなわれ、「Neuroscience nursing in the 21st century」をテーマに、約34カ国2000人の参加者があり、多くの研究発表と討議が活発に行われた。さらに、専門看護認定度に関わる credit プログラムが提供された。国事情によって看護職の関心は様々であったが、共通する点は「対